

ウナギ、性転換の可能性？

成長過程で性別割合逆転 謎多い生態解明へ

青森県内水面研究所

土用の丑の日を迎え、市民の食欲をそそっているウナギ。だが、全国的な流通量の減少で価格が高騰し、産地の東北町・小川原湖でも、近年の漁獲量はピーク時の100分の1となる約1ト前後にとどまるなど厳しい状況となっている。そんな中、十和田市の青森県産業技術センター内水面研究所が20日、「ウナギは性転換している可能性がある」という、興味深い研究内容を報告した。いまだ謎が多いウナギだが、生態を解明することで効果的な幼魚の育成や繁殖につながる可能性もあり、漁業関係者も注目している。

(林泰輔)

同日、東北町内で開かれた報告会で、松谷紀明研究員(30)が発表した。研究によると、2016年の5月に調査用の幼魚610匹を用意。うち腹を割いて79匹の性別を調べたところ、雄

40匹、雌2匹、不明37匹と雄の方が圧倒的に多かった。仮に性別不明の37匹が全て雌だとしても雄、雌が半分の割合。同研究所は実際に放流した残りの約53匹は、統計上雄の方が多

いと想定した。放流後に追跡調査ができるよう、調査用の幼魚の目には蛍光色素を加えたほか、DNAも採取するなど一般の幼魚と区別した。

その後の16、18年の3年間で、捕獲された標識ウナギは計12匹。このうち雌が10匹、雄2匹で性別の割合が大きく逆転。さらに雌の10匹は全て150日以上経過したものだった。一定の大きさに成長する過程で雄が雌に変わった可能性がある

。松谷研究員は「実際に放流した幼魚の性別を全て判別しているわけではない上、サンプル数も少ないため、確実に性転換をしたという証拠にはならないが、(性転換の)可能性はある」と説明した。

このほか、16、18年まで、高瀬川でシラスウナギの遡上を確認。また、放流魚が順調に生育し、約1年半で全長約20センチ、重さが約5倍に成長していることも明らかになった。松谷研究員は「放流魚は成長しないという説もあったが、養殖種苗の放流も資源保護の一助となり得る」と意義を強調した。

次々と明らかになる小川原湖のウナギの生態。松谷さんは「生態を明らかにして、放流が資源保護につながることを立証し、小川原湖のウナギ資源を回復したい」と意気込む。

10、11月には、海へ産卵へ向かう「下りウナギ」の捕獲を試みる方針。



小川原湖に放流するウナギを調べる青森県産業技術センター内水面研究所の松谷紀明研究員(十和田市) (同センター提供)

